

ITAS-Project 科学技術発達に見られる文化的要因： 日本とドイツにおける i-mode

ドイツ・カールスルーエ国立研究所
Institute for Technology Assessment and Systems Analysis

テーマ

携帯電話のためのデータ・サービスである「i-mode」は、NTTDoCoMoによって開発され、日本国内において大成功を収め、著しく普及した。2002年春以降E-Plus社により同様の、そしてVodafone社より類似のサービスが提供されている。DoCoMoはi-modeを世界規模で普及させるべく努力を続けている。そこで必ず経済上、規制上或いはまた文化的背景を持った問題に直面することになり、果たしてその努力が報われるであろうか否か、という新たな問題が浮上してくる。

当プロジェクトの目的

当プロジェクトの目的は第一に、日本におけるi-modeの成功、とりわけその文化的要因の果たした役割について学び、後のドイツ、及びヨーロッパにおける携帯通信産業の発展に役立てることである。

研究課題

当プロジェクトの研究課題は大きく分けてi-mode自身に関するもの、方法論上、及び構成上に関しての三つに分けられる。

- i-modeに関しては、いかにしてi-modeがこのような大成功を収めえたのか、どこまでがNTTDoCoMo独自の技術革新による物なのか、その原因を探ることである。それと同時にKDDIやJ-Phone（現Vodafone）等、同業他社の状況についても当然、論考されるべきもので、当時の状況の質的なコンステレーションを再確認するものである。また過去の事象に加えて、現状況下のオプションと長期間におけるi-modeの発展についての分析も、重要な課題の一つである。
- 方法論に関していえば、当プロジェクトは比較文化的アプローチの集積になると予想される。技術革新において文化的要因の果たす役割で言えば、日本は特殊であることは間違いなく、ドイツの日本研究者たちも指摘するように性急に結論付けることは避けねばならない。文化的要因による影響については、文献等においても議論の分かれるところである。

- 構成に関しては日本の文献や資料を包括するのみならず、可能な限り日本の研究者との共同研究という形を目指すものである。

メソッド

日本及びi-

modeに関する研究や文献は数多くあり、当プロジェクトに活用されてしかるべきである。尚、限られた予算内ではあるが、日本とヨーロッパの双方で専門家へのインタビューも予定している。究極の目的は個人、グループ、或いは各国の国内レベルに文化的要因の及ぼす影響についての質的なモデルに迫ることである。

当プロジェクトのチームメンバーである

アーンド・ヴェーバーとベルンド・ヴィンガートはドイツ・カールスルーエ国立研究所のテクノロジー・アセスメント及びシステムアナライズ・インスティテュートに所属しており、ドイツ連邦教育・科学省の依頼を受け一年間の予定で当研究に従事している。当インスティテュートはあらゆる科学技術に対し、その技術の開発が社会に及ぼす影響の内容と程度を事前に予測、且つ評価を行い、社会環境等の保全上必要な措置を研究する機関である。

共同研究者

当プロジェクトはドイツ国内の日本研究に従事する研究者及び日本国内の研究者双方の協力を得て実施するものである。

リサーチ・アプローチ

当プロジェクトは社会学的見地になつての技術革新に関する研究であると同時に科学的、社会経済的、比較文化的要素も内包するものである。

コンタクト

アーンド・ヴェーバー Arnd Weber: weber@itas.fzk.de

ベルンド・ヴィンガート Bernd Wingert:

横井朝恵 asaeyokoi2003@hotmail.com

ITAS: <http://www.itas.kit.edu>

Stand: 04.02.2011